

朽木陣屋跡発掘調査地元説明会資料

令和4年(2022年)11月23日(水・祝)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要 朽木陣屋跡は、中世名族の佐々木氏の流れを汲む朽木氏が所領を治めるために、現在の高島市朽木大字野尻に設置した施設です。それ以前から野尻にあったとされる朽木城を、江戸時代になって陣屋に改築したものと考えられています。昭和58年(1983年)3月28日にその一部が県史跡に指定されました。

調査の概要 朽木陣屋跡では、平成12年度に滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会によって、主要地方道小浜朽木高島線道路改築工事に伴う発掘調査が実施されました。これが朽木陣屋跡にたいする最初の本格的な発掘調査となりました。調査では、堀・橋・登城道と敷地を区画する石列などが見つかり、これらの遺構は少なくとも15世紀前葉(室町時代)にはすでに一部構築され、その後16世紀後葉～18世紀(戦国時代～江戸時代)まで利用されていた可能性が指摘されています。

今回の調査は、小浜朽木高島線道路整備事業に伴う発掘調査として、平成12年度調査地の西側の地点を対象に、本年7月から発掘調査をおこなっています。調査では、二面の遺構面を確認しました。調査区東半部では、平成12年に確認された堀・登城道・敷地を区別する石列の延長部分と、また調査地西端部で土坑が検出されています。

その他に、縄文時代の土器や石器などがあります。これらは朽木地域では初めてまとまって確認されたもので、注目されます。

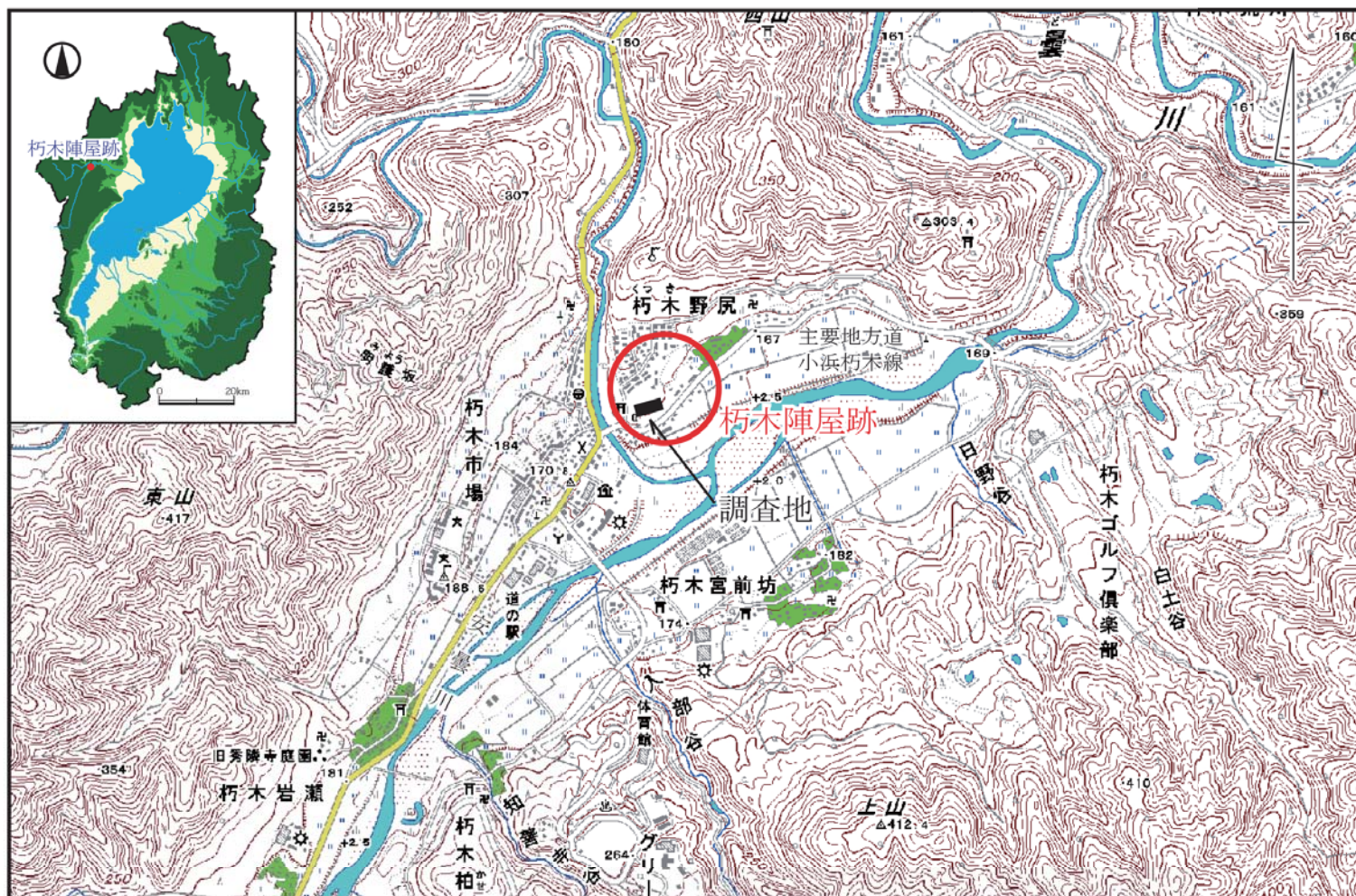


図1 朽木陣屋跡の範囲(赤枠)と今回の調査地の位置(黒塗)

検出遺構・出土遺物

●堀について

位置・規模 調査区の南東側で、幅約5m以上、全長約16mにわたり検出しました。深さは、最も深い箇所約1mを測ります。堆積土層を観察した結果、確実な年代は不明ですが、この堀が最終的には人為的に埋め戻されていることも確認しました。

出土遺物と年代 堀の埋土から出土した遺物の大半は小片で、堀が使用されていた江戸時代の遺物は今回確認されませんでした。概ね15世紀後半頃の土師器や陶器、青磁などが見つかっています。今回の調査結果と平成12年度調査成果から、堀の埋土中からは15世紀後半～18世紀頃（室町時代～江戸時代）までの土器が出土していることになります。



今年度の対象地は、県史跡指定範囲の南側で、平成12年度調査地の西側にあたります。今回の調査では、平成12年度に見つかった石列堀・登城道の延長部分を検出し、また西端で土坑を確認しました。石列堀・登城道は過去に示されている絵図等に近い位置で確認されました。

●登城道（道路状遺構）について

位置・規模 上述した石列と堀の間の、幅2.5～3.5mの範囲を、表面の粘土・砂層の堆積状況から、登城道（道路状遺構）と考えています。

図2 右絵図の「登城道」にあたる部分です。全長約23m、平成12年度の検出分を合わせると、約43m以上を測ります。表面に堆積する粘土・砂層は、道路として使用する過程で生じた凹凸を粘土で補修した結果だと考えられます。

出土遺物と年代 登城道（道路状遺構）については遺物は出土していませんが、堀と同じく江戸時代には存在していたものと考えられます。後述するとおり遺構の切合い関係から、石列と同時期頃に整備・補修されていた可能性が考えられます。



●石列について

位置・規模 調査区の南側から東側にかけて、約23mにわたり検出しました。平成12年度に東側で見つかった部分と合わせると全長約43m以上におよびます。主軸は北に対して約60度東へ振っています。石列を構成する石は、砂岩やチャートなどの径30～50cm超の川原石が多く、いずれも安曇川流域で採取できる石材です。

出土遺物と年代 石列については、前述した道路状遺構の表面に堆積する粘土・砂層が、石列を構成する石を一部覆うことから、少なくとも道路状遺構と同時期に存在していたと考えられます。また、石垣を構築する際に施される「裏込め」が、一部で確認できることから、本来は石垣だった可能性もあります。



●土坑について

位置・規模 「土坑」というのは、人為的に掘りくぼめられた穴のことを指します。穴の目的・性格が分かりにくい場合に用いられることが多い呼称です。

今回の調査でも、調査区の西側にあたり、一段高くなった部分で検出されました。長軸1.3m、短軸0.8m、深さは約0.3mをはかります。埋土中にかわらけ（土師器皿）が多数包含されていました。多くのかわらけが破片となり正位置を留めておらず、また見つかった深さもバラバラでした。

出土遺物と年代 見つかったかわらけは、大半が15世紀後半頃のものです。比較的短期間のある時期に、まとまって埋まったものと考えられます。いわゆる「ゴミ穴」のような目的で使われた穴でしょうか。

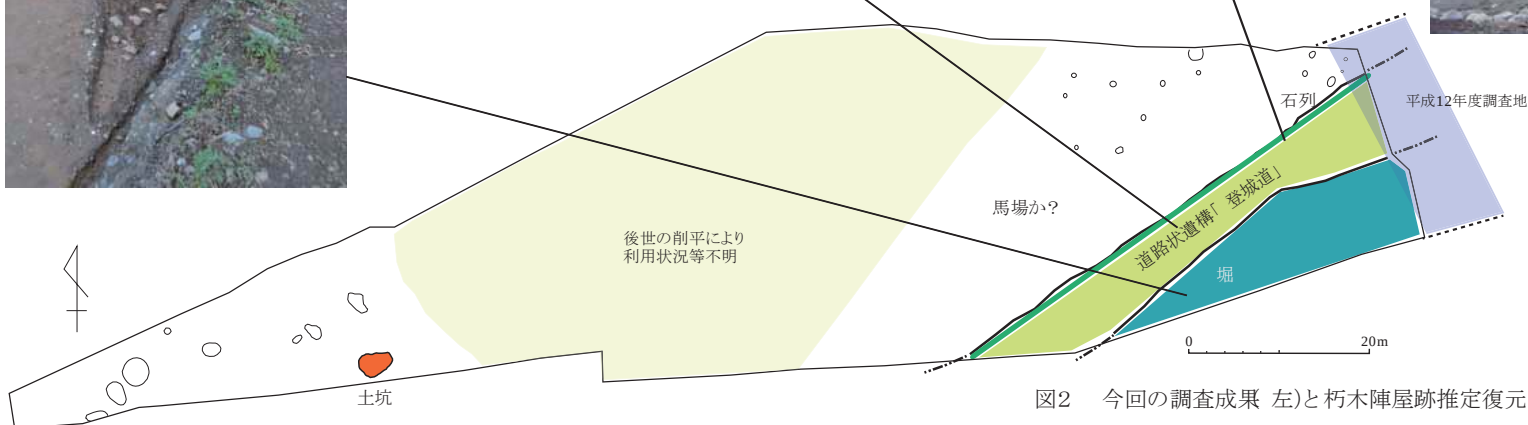
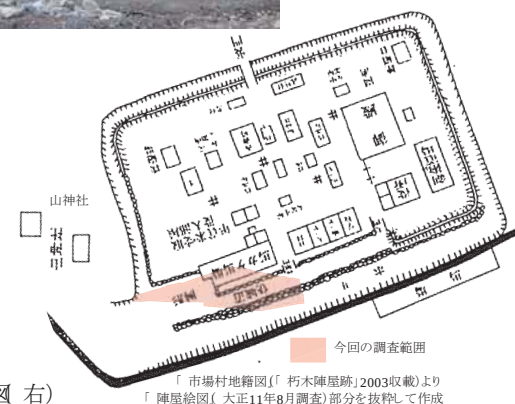


図2 今回の調査成果（左）と朽木陣屋跡推定復元図（右）



「市場村地籍図」（「朽木陣屋跡」2003掲載）より
「陣屋絵図」（大正11年8月調査）部分を抜粋して作成

●縄文時代の遺物について

今回の調査では、朽木地域では初見となる縄文時代の遺物が出土しました。前述した堀の中から、15世紀後半の土器に混ざって見つっています。縄文土器（^{とったいもんき}凸帯文期の深鉢形土器）の破片のほか、打製石斧（^{だせい せきふ}土堀具）、磨石・敲石（^{すりいし たたきいし}木の実等の粉碎加工具）、打欠石錘（^{うちかき せきすい}漁撈具、網の錘）、サヌカイト製の剥片（^{はくへん}矢じりやナイフなどの素材もしくはそれらを作った残り）などが見つかりました。

これらの土器や石器は、縄文時代晩期、今から約2,500年前頃のものと考えられます。堅穴建物などの遺構（^{たてあな たてもの}）は見つかりませんが、縄文土器や石器の大半で顕著な磨滅は認められませんので、遠くから水や土砂によって流されてきたモノではなく、この付近で生活していた当時の人々が手放したものでしょう。残念ながら、まだ当時の情景を描けるほどの情報はありませんが、土器や石器の種類がある程度揃っていることを考えると、縄文時代にそれなりの人数がこの地で過ごしていた可能性があります。



写真 見つかった縄文時代の遺物
上左: 縄文土器
上中央: 左から打欠石錘、打製石斧
上右: サヌカイト 製剥片
下: 磨石・敲石

まとめ

今回の調査成果は、以下の諸点にまとめることができます。

- ①堀、登城道（道路状遺構）、石列が、これまでに示されている陣屋絵図等に記された位置で確認されました。
- ②今回の調査では、堀の埋土からは、堀が使用されていた江戸時代の遺物は確認されませんでした。小片ですが室町時代後期（15世紀後半）の土師器、陶器、青磁等が出土しました。特に、今回見つかった室町時代後期の土器は、江戸時代に陣屋が整備される以前から、当該地周辺に何らかの施設があった可能性を示唆します。
- ③堀の埋土からの出土という、当時の使用状況等を留めて見つかったものではないものの、朽木地域では初見となる縄文時代晩期の土器や石器が、一定量出土しました。

●今後は、今回の発掘調査記録の整理・検討をすすめ、調査報告書にまとめていきます。機会をみて、皆様に調査成果をお知らせしていきたいと考えております。今後ともご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。